

昭和二十四年七月二十五日第三(種月一回・十五日發行)可

(通第一九四号)

# 慈光

第十七卷 第七号

## 目

歎異抄第十一章講義 ..... 近角常観 ..... (1)

歎異抄の「も」の味わい ..... 松本解雄 ..... (9)

想像の仏と真実の仏 ..... 花田正夫 ..... (11)

次 養老院生活半ケ年 ..... 三瓶徳英 ..... (16)

堂の鈴 (十七) ..... 佐藤強三郎 ..... (21)

# 歎異抄 第十一章 講義

近 角 常 観

この章より己下一章々当時行われつつあった異義につきて、これを歎きて子細にその誤謬を指摘して、遺憾なく正さるのである。歎異抄にて尊き聖人の御教化それ自身を挙げたまいたは前九章なれど、正しく歎異鈔と名のつく所以のものは後九章に一々異義を挙げて歎き正さるる点にあるのである。そして第十章は総括して無義を以て義とする念仏に対してはからいをさしはさみ、異義を云うなどあるまじきことを述べたまいて、此章より、一つ一つその異義を挙げたまうのである。かく言えは前九章と後九章とは関係なきかと云うに決してそうではない。つまり積極的に云いあらわすのと消極的に言いあらわすとの區別にして、後九章に挙げる異義の異義たることの明らかに標準たるべき、聖人直々の御言葉が前九章である。心を止めて拝読するに前九章の御言葉に應じて、後九章の異義、及びこれに対する歎異抄著者の了解があらわれてくる。これは大体何人も氣付くことながら、細かに注意せば、一々相照

応するかの如くに思われる。これは当然のことにして、当時の異義を歎いて筆を執られる已上は、積極的に云うも、消極的に云うも自然に同じ所に陥るはもつとものことである。

その大体を概言すれば、先ず誓願不思議、名号不思議の區別を立つる異義を歎きたまうのである。しかも誓願不思議を信ずると念仏を称うるとは決して分つべからざること第一章に適切に言いあらわしたまうのである。

而して第二章に至りては猶聖人の御領解として、親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべしとよきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり云々。念仏はまことに云々。弥陀の本願まことにおわしまさば云々、とつねに本願をはなれぬ念仏なることを示したまうこと十二分である。而して第十一章に至りて当時の異義を挙げ来りて、誓願不思議と名号不思議とを別にすることを厳しく、誡めたまうのである。

又次に、第二章に、しかるに念仏のほかに往生のみちをも存知し、また注文等をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんはおおきなあやまりなり。もししからは、南都北嶺にもゆゝしき学生たち多くおわせられてせうろうなれば云々。とあるのは深き意味なき様なれど、第十二章の経釈を読み学せざるともがら往生不定のよしのこと、乃至、学問をむねとするは聖道門なり云々、とあると応ずるが如し。

又次に第三章の、善人なおもて往生とぐ、いわんや悪人をやは、恰も第十三章の、弥陀の本願不思議におわしませばとて悪をおそれざるは、また本願はこりとて往生かなうべからず、ということと同意にして、罪惡救済の極所、悪人正機の骨髄を示されたるもの。強いて附会せば前九章と後九章と各々照應するが如く解することも出来るほどに見ゆるのである。

されどかくあまり切り整えて考えんとするは無理が出来らる。されど子細に考うれば意外にその意味の連絡が貫通してある。

後の章に「撰取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる罪業をおかし、念仏もうさずしておわるとも、すみやかに往生をとぐべし」とか。「廻心もせず、柔和忍辱のおもいにも住せざらんさきに、いのちつきば、撰取不捨の誓願

はむなしくならせおわしますべきにや」とかいう言葉は、皆第一章の、所謂撰取不捨の利益の意味が、到るところに貫通している。一々あげ来らば網の目を引くが如く、全篇相連りて動くことになる。これ信心そのものから脈略貫通して居るから、かくあるべき筈である。

さて、すゝみて是より以後、一々挙げてその誤りを正さるる異解なるものは如何なるものであるかを知らねばならぬ。かつて序説において、著作当時の信仰界と題して、聖人在世、及び滅後の信仰的悪傾向を論じて置いた。そのことを再言するに、先ず第一に起りたるは、真実御慈悲を戴かずして、罪惡救済ということを邪見にとり、悪を助ける本願故に、悪を犯してもよいと考えた。これは末灯抄及び御消息集に誡められた如く、業あり壽を好むべからずと云う教誡の起るわけである。そこで第二に是に対して起り来る異義は、たとい弥陀の本願不思議とはいえど、悪しき者は助からぬという律法主義に陥るのである。而して歎異抄がこの第二の傾向、即ちこの再び起りたる律法主義に対して再び聖人の真意たる絶対他力の罪惡救済を説き給うが、歎異抄の主眼とするところである。このことはすでに序論に詳説した次第である。

さてこれより進みて研究すべき事は、その再び起りたる

律法主義は如何なる説なりしかという問題である。この問題は、つまり歴史問題で諸種の材料を以て、充分に事実を考証する必要がある。さりながら、これは一朝一夕に論断出来る事ではない。将来真宗の原始時代の研究として、恐らくは大いに耕すべき余地ある問題であろう。さりながら、私はこの点において未だ充分なる歴史的材料を持たぬ故に、古人の説を基礎とし、これに対して信仰実験の径路をたどり、鄙見を述べるより致し方がない。

祖師滅後の異解につきて、大いに研究せられたるは三河の妙音院了祥師である。まだ充分にこれを調べねども、その歎異鈔聞記に種々の異義を挙げて、結局これを二種の異解に概括してある。一つには、誓名別信計、二つには、専修賢善計である。誓名別信計とは、名号不思議ではないかぬ、誓願不思議を信せねばならぬと云う点に力をいれるのである。そこで自然に聞きわけ、知りわけて、能く理解出来ねば不可という事になる。それ故に、結局学問せねばならぬという計らいを生ずるのである。次に専修賢善計というは、賢善精進の相を現じて念仏せねばならぬという異解である。それ故、結局悪をなしてはいかぬ、立派なる行をせねばならぬ、殊勝にせねばならぬという計らいを生ずるようになる。

この二種の傾向は、信仰が律法主義に陥るときは常に生

けだしこの二種の弊風は当時の第二の律法主義の重なる異義たりしことは疑なき事であろう。然し了祥師が当時の異義を必らずこの二種の何れかに配当せんと試み、歎異抄の各章をいずれかに割り当てたるはすこし附会の説に過ぐる感がある。されど師の如くこの方面に研究の歩を向けたるは、その効没すべからざるところである。然しこの如く信仰的歴史は、又信仰実験の眼を以て見るということは忘れてはならぬ。

「一文不通のともがらの念仏申すにおうて、なんじは誓願不思議を信じて念仏申すか、また名号不思議を信ずるかといひおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいひらかずして、ひとのころをまどわすこと、この条かえすがえすもころをとどめておもしろいわくべきことなり」

既に詳論せしが如く、学問風に聞きわけ知り分ける事を得意にする術学派の異義なる故、一文不通の人にして素直に念仏を信じ称する人に対して、汝は誓願不思議を信じて念仏申すか、又名号不思議を信ずるかといひおどろかすのである。

そこでこの異義に対して最も警戒を与うべき欠点は、誓

するところのものである。これは古今の宗教歴史に同じ轍を踏むものである。バラモン教の如き、ベエダを始めとして結局哲学風と苦行風とに陥っている。釈尊はこれらの戯論と苦行とを排して涅槃の実験を説き給いたのである。又ユダヤ教にては結局バリサイ、サドカイの学者、及び律法者の偽善を排して、愛のクリスト教が起つたのである。そもも信仰の生命が枯渇してくれば自然に自力に陥つて、学者風、殊勝風になるのである。故に誓名別信計は、結局学者念仏となり、専修賢善計は、結局殊勝念仏となるのである。

この故に、第十二章には、経釈をよみ学せざるやから、往生不定のよしのこと、この条すこぶる不足言のことと云いつべし、と云つて学者念仏を戒しめ、第十三章には、弥陀の本願不思議におわしませばとて悪をおそれざるは、また本願ほこりとて往生かなうべからざると云うこと、此条本願を疑う、善悪の宿業をこころえざるなり乃至、持戒持律にてのみ本願を信すべくば、われらいかでか生死をはなすべきや乃至、あるいは道場にはりぶみをして、なんなんのこしららんものをば道場へ入るべからずなんどいふこと、ひとえに賢善精進の相を外にしめして、内に虚偽をいだけるものか」と云うて、殊勝念仏を戒め給うたのである。

願不思議、名号不思議と、不思議の文字を使いながら、不思議ということが信仰の上に受けられて居らぬのである。つまり誓願、名号の訳を聞き開きたに止まっているのである。そも／＼親鸞聖人の信仰の要点は、この不思議といえる点に存するのである。故に仏法不思議、誓願不思議、仏智不思議等、みな一つである。この不思議を信ずると疑うとが真宗たる与否との分水嶺たることは、第一章及び第十章においてくり返した通りである。今この不思議を信ずるといふは、誓願、名号のわけを聞き分け知り分けると云うことではない。如来のお慈悲が心に届くなり、誓願の不可思議なること、又念仏の不可思議なる事が疑うこと出来ぬようになったのである。それゆえ、いよいよこの大悲の親心が心に届くなり、あゝお不思議と頂けるのが、誓願不思議、名号不思議を信じたのである。

然るにこの異解者は不思議を知り分けるつもりで居る。知り分けたならばもはや不思議ではない。不思議が信せられたならば、真にお不思議と心も言葉もたえはてた有様である。そこでこの章を読む者は是非とも、未灯抄をひき合せて拝読せねばならぬ。

未灯抄

誓願名号同一事

御ふみくわしく、うけたわまりそうらいぬ。またさては

この御不審しかるべしとおほえず候。そのゆえは誓願名号と申してかわりたること候わず。誓願をはなれたる名号も候わず、名号をはなれたる誓願も候わず候。かく申し候もはからいにて候なり。ただ誓願を不思議と信じ、また名号を不思議と一念信じとなえつるうえは、何条わがはからいをいさすべき。ききわけ、しりわくるなどわすらわしくはおおせられ候やらん。これみなひがごとにて候なり。ただ不思議と信じつるうえはとかくの御はからいあるべからず候。往生の業にわたくしのはからいはあるまじく候なり。

あなかしこく。ただ如来にまかせおわしますべく候。あなかしこく。

五月五日

親 鸞

教名御房

このふみをもて、ひとくにもみせまいらせたまうべく候。他力には義なきを義とすとは申し候なり。

聖人の御言葉に接するとき、渾然として何とも言えぬ味がある。歎異抄は正宗の名刀の如く、如何にも切れ味は鋭くある。ちれど鋭くあるだけ余地がない。末灯抄は丸き言葉の間に無限の味がある。現にこの章の如きも、誓願名号の關係が如何にも周到に示されてある。ちれど末灯抄は

かくめでたく御せ候えどもこれみなわたくしの御はからいになりぬとおほえ候、とは、たとい言語は正しくあるとも御不思議といただけねば、つまり私のはからいにすぎぬのである。故に歎異抄の次の文に、如何にも剗切周到に誓願名号の關係を示されても、これをききわけ、しりわくる心持で見ではならぬ、ただ不思議とただかねばならぬ。

「誓願の不思議によりてたもちやすくなえやすき名号を案じいだしたまいて、この名号をとえんものをむかえとらんと御約束あることなれば、まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて生死をいずべしと信じて念仏もうさるるも如来の御はからいなりとおもえば、すこしもみずからはからいまじわらざるがゆえに本願に相應して、真実報土に往生するなり。これは誓願の不思議を信じたてまつれば名号の不思議も具足して、誓願名号の不思議ひとつにしてさらにことなることなきなり。」

是常に反覆する、選択本願念仏の意味である。誓願の不思議によりて、たもちやすくなえやすき名号を案じいだしたまいて云々、というは、即ち選択摂取のことである。即ち布施、持戒等の諸行を扱ひすて、いかなるものも称

何等の訳柄を言わずに直ちに信仰その者が顕れてある。歎異抄には、二つの不思議の子細をも分明に言い開かずして人の心を迷すことというてある。末灯抄には「ききわけしりわくるなどわすらわしくは仰せられ候やらん、これみなひがごとにて候」と先ず学者念仏の根性を戒めたまいてあるのみならず「誓願をはなれたる名号も候わず、名号をはなれたる誓願も候わず候。かく申し候もはからいにて候なり」と飽くまで理屈を戒めたまいてある。そして不思議と信ずるといふ点に力をこめて示されてある。即ち「ただ誓願を不思議と信じ、また名号を不思議と一念信じとなえつる上は何条わがはからいをいさすべき乃至ただ不思議と信じつる上はとかく御はからいあるべからず」と仰せられてある。それゆえ末灯抄の次の御消息にも左の如くある。

又 仏智不思議と信すべきこと。

御ふみくわしくうけたまわり候いぬ。さては御法門の御不審に、一念発起のとき無碍の心光に撰護せられまいらせ候ゆえに、つねに浄土の業因決定すとおおせられ候。かくめでたく候。かくめでたくおおせ候えども、これみなわたくしの御はからいになりぬとおほえ候。ただ不思議と信せさせたまひ候いぬるうえは、わすらわしきはからいあるべからず（下略）

えやすき、持ちやすき名号を選ばたまいたのである。しかしてこの名号を称えしめんと約束が本願である。かく我等が為に五劫思惟永劫修行したまう大慈大悲の親心はいかなる御不思議といたされたのが、誓願の不思議を信じたのである。その親心がいたただけるや否や、念仏申きんと思いたつ心のおこるのが名号の不思議である。その名号は浄土にむまるる業か、地獄におつる業か存知せねども、知らず識らず、南無阿弥陀仏と称えらるるは、つまり如来の御はからいにして、即ち我名号の本願に相應するものである。すでに誓願名号が不思議である。その不思議が不思議と信せられ称えられるのが不思議が信せられたのである。かく信せられ称えられるのが既に如来の不思議の御はからいである。蓮如上人の御文に、信ずる心も念ずる心もみな弥陀如来の御方便より起さしむるものなりとあるが、即ちみな如来の御はからいである。

かく信仰の味から頂けば何の苦もなきことなるも、此処に間違の生ずる訳は故なしではない。それは同じ法然上人の御門弟の中にも、他の人々は選択本願を忘れて、念仏を自行になすのである。夫故に親鸞聖人はその選択本願を信せねばならぬという点に重きを置きて御教化なされたが真宗の真宗たる点である。略文類に、深籍本願興真宗、というも此意味である。又、選択本願弘悪世、というも此意

味である。

そこでその意味を信仰の上で頂かず、理解の上で律法的に考えたものゆえ、念仏しても誓願不思議を信ぜねばならぬと主張する異義を生ずるに至りたのである。念仏の律法主義を払うために本願不思議をすすめたまいたるところ、又誓願不思議を律法的に理解することになつたゆえに、この誤りを生じたのである。真に本願不思議が信ぜられたならば自然に念仏が称えられるのである。

選択本願の事を述ぶるとき私が常に引く譬喩にて言え、選択本願というは、親が子のために選択して下された衣服である。即ち乱暴の子のために、絹布等の衣服を選びすて、手織の衣服を選び取りて作りてくれた親心である。而して念仏は恰もその手織の衣服である。その親心を受けたのが誓願不思議を信ずるのである。その親心を受けながら衣服を着ぬならば真に親心を受けたとは言えぬ。その親心を受けるなり直に衣服を着する如く、誓願不思議を信ずるや否や、念仏称えらるるのが名号不思議である。一本に「誓願をむねと信じたてまつれば、名号の不思議も具足して云云」とある。このむねの文字は二者の間に軽重を定むるきらいある故に、無き本を可とする。かく誓願の不思議、名号の不思議は全く同一にして、如来の我等罪惡のものを助けたまう御不思議なり。

信ぜられぬ事になる。然るに十九、二十の願を立てたとはい仏智不思議を疑惑するものでも必ず助けねばならぬといふが果遂の願である。

辺地懈慢界は菩薩処胎經の説で十九の願の化土である。疑城胎宮は大經の説で二十の願の化土である。仏智を疑惑する者は自業自得の道理で、自ら懈怠憍慢なるもの故に懈慢界に止り、疑惑の心を脱せざる故に、含華未出の結果となりて疑城胎宮に止るが、五百歳の年を経れば大慈大悲の果遂の願のために、遂に第十八願の真如の門に転入して真実報土に往生することの出来るのは、疑惑ながらも称えさして下さる名号の御不思議力である。そしてかくの如く遂に第十八願に転入さして頂くのは即ち十九、二十の本願あればこそである。故に名号の御不思議で第十八願へ知らず識らず転入さして下さるのは全く十九、二十の本願不思議のお力である。

ここに一つ注意すべきことは十九、二十の本願といえは直ちに方便の願にして、恰も疑惑の人を追い込めておく牢獄の如くに考えられて居る。如何にも仏智を疑惑するがため、自業自得の結果、七宝の牢獄に墮するも、如来本願の思召は、たとい本願を疑惑するものでも、当方は決して捨てずして飽くまで本願を信ぜしめんとする仏の大慈大悲が十九、二十の本願である。何人も權実真仮ごんじつしんげの教判ばかりに

「つぎにみずからのほからいをさしはさみて、善惡のふたつにつきて往生のたすけさわり二様におもうは、誓願の不思議をばたのまずして、わがころに往生の業をばげみて申すところの念仏をも自行じぎやうになすなり。このひとは名号の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども辺地懈慢、疑城胎宮にも往生して果遂の願のゆえに、ついに報土に生ずるは名号不思議のちからなり。これすなわち誓願不思議のゆえなればただひとつなるべし。」

前節に挙げたるは当初より誓願不思議と信ずる直入の機につきて示したまいたのである。そして今ここに挙げたるは誓願名号の不思議を信ぜざる廻心の機につきて示したまいてある。

即ち仏智不思議を信ぜずして、自力の計らいをさしはさみて、善業の人は助かる、惡業の人は助からぬと、自己の業の善惡によりて往生の定不定あるものと二様におもうは全く罪惡の者をして給わぬ誓願不思議を信ぜずして、自分の心にて往生の業を励んで、稱うる念仏をも自分の行とする故に、結句名号の不思議を信ぜざることになる。

しからばかく不思議を信ぜざる者は如何にすべき。彼等は仏智不思議を信ぜざる故に、永久仏陀に近づく事の出来ぬということになれば、一旦不思議を信ぜざる者は、永久

氣をつけて、その權仮は結局真実に引き入れんと仏陀の大慈大悲と感謝せねばならぬ、この意味は『末灯鈔』の次の文によりて明らかに了解出来る。

その信心をうることは釈迦弥陀十方諸仏の御方便よりたまわりたりと知るべし。しかれば諸仏の御おしえをすることなし、余の善根を行ずる人をそしることなし。この念仏する人をにくみ、そしる人をも、にくみそしることをあるべからず。あわれみをなし、かなしむころをもつべしとこそ聖人はおおせごとありしか、あなかしこ、あなかしこ。仏恩の深きことは懈慢辺地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、弥陀の御誓のなかに第十九二十の願の御あわれみにてこそ不可思議のたのしみにあうことにてそうらえ。

世に我を疑うものを疑わず、我を惡む者をにくまざる如く、誓願不思議、名号不思議を疑惑するものをも如来は見捨てたまわぬ親心が十九二十の本願である。そして疑いなからも稱えらるうちに遂に御慈悲がとどいて下さる。これ即ち名号不思議、誓願不思議である。かく徹頭徹尾ただ不思議と信ぜさせて頂くの外はない。

# 歎異抄の『も』の味わい

松 本 解 雄

歎異抄はどの章を読んでも、また何度読んでも、その都度深い感銘をよびおこしてくれます。最近毎月一回愛媛大学仏教青年会で催しております歎異抄講読会で第九章を読み、今更ながらお念仏の尊さ、お慈悲のお手あつさに胸うたれたことあります。

それは信後の不審について唯田房が親鸞聖人に対して「念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜のころおろそかにせうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのせうらわぬは、いかにとせうろうべきことにてせうろうらん……」

と、おたずねにられましたくだりのところです。その時の聖人のお答に

「親鸞もこの不審ありつるに、唯田房おなじころにてありけり云々」

と、ありますが、私はこの一行のなかに、さらにいうならば「親鸞も」の「も」の一字に無限のお慈悲を仰ぐこと

が出来るように思うのであります。恐らく唯田房は、ここまでおききた時に、今まで胸底に渦巻いていたもやもやがかりとはれて、心から合掌念仏されたことと思われ

ます。  
歎異抄では次に、よろこべるからおたすけにあずかるのでもないし、お浄土へはやく参りたいという心のおこるころが何等往生の確証となるのではないのであって、それらはすべて煩惱の仕業である。ところが他力の悲願は、このような煩惱の所持者のためのものであるから、そのような煩惱にわずらわされているものこそ、ほんとうにお救いにあずかることが出来るのだというような行きとどいたみ教えが述べられています。

池山先生はご講話の際、殆ど毎回

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

のところをお引きになつて、御自身の入信の過程をお話しされるのを常とされましたが、私はこの「親鸞におきては」は信の確立というか、信仰の基盤というか、つまり如来との出会いが語られていると思うのでありますが、「親鸞も、この不審ありつるに」は信の旅路における「ともしひ」であると味わわれるのであります。

私達は私達の過ぎてきたことども、そして今現に立つている足下を、いつわりなく如実にふりかえりのぞみみたならば、ほんとうに「ただ念仏して」であつたと了得されるのであります。

しかしながら、私達は煩惱しげく「恥ずべく傷むべき」存在であるが故に、ともすれば如来を忘れ、放逸、無慚のとりこになり果てようとしています。その時の胸のもやもやを七百年の昔、唯田房は私達に代つて、聖人におたずねしたわけであります。

「親鸞もこの不審ありつるに、唯田房おなじころにてありけり」

と、何という慈心あふれたお言葉でありましょう。私達と同じ野に立つて全面的に抱きかかえて離れたまわぬ（撰取不捨）絶対無限のお慈悲でなくて何でありましょう。

約言していうならば、私は「親鸞も」この不審ありつるに「も」の一字に絶対無限のお慈悲を味わうことがで

きるように思うのであります。そしてそれはまた、

願力無窮にましますば、罪業深重もおもからず  
仏智無辺にましますば、散乱放逸もすてられず

の「も」とあわせて味わいますときにさらに深いものがあ  
るように思います  
(四〇・三・七)

## 全体と部分

足利 浄田 師

「竹を画いて風を顕す」という言葉がある。そこに竹の小枝が画かれてある。風に吹かれてある竹の如く見える。これは竹を画いたものではなく、風を画いたものである。竹なくして風を知ることは出来ない。竹を見て風を知るものはその全体を見るものである。竹のみを見て風を知らざるものはその半分を見ているものである。

同時に表裏を知り、同時に浅深を知るものは、もの全体を見るものである。その一面のみを知るものはその部分を見るものである。

蘭の画に風蘭あり、雨蘭ありと聞く。またこらの消息をいうたものであろう。

# 想像の仏と真実の仏

花 田 正 夫

或真面目な医学者がおられました。真宗の信者の家に生れ幼い時から仏前にお礼をするように教えられて、成人の後も毎日四十分間の勤行を欠かされたこともなく、ドイツに留学中も、名号を掲げてホテルで勤行せられました。ところが今度の大戦となってお子達が戦死、病死、更に行方不明となるなど、思いもかけぬ不幸が続きますと、今までのように仏の御加護を信じ、お礼をするという心が崩れて、四十分が三十分、二十分と縮められて、遂には形式だけのお礼しか出来なくなりました。

そのうちに御自身が大病となられて、暗い淋しい中に最後の息を引きとられました。

このことを最近になって知人から聞かされましたについて、非常に教えられることが多いのであります。

私共が仏の教を聞きはじめますと、それぞれ自分で種々の仏様を想像し、それが真実の仏様だと思ひこんで、それを信仰の対象として拝むのであります。

い、というようになって、段々お礼もおろそかになり信心も崩れたのであります。この場合、この方の想像された仏様は、私共の煩惱生活の安全を保証して下さる方と想定していられたのであります。

親鸞聖人は「唯心の弥陀、己心の浄土」ということをきびしく戒めていられます。自分の心で描き出した仏様や、自分の思惑で想定した浄土は皆本当のものではなく、浄土の真実のさとりというものは、私共の知慧や才覚であれこれと定められるものではありません。

昔から盲人の象見物の譬で、その愚さを教えられます。或者は胴にふれて、壁のようだといい、或者は脚にふれて丸い柱のようだと判断し、或者は尾をつかまえて、太い綱のようだと主張しているのに等しいと申しますが、またこの譬ではこの場合に適切とは申せません、すくなくとも部分的には知っているのですから。それよりもむしろ子供達が夏の夜空にむかって長い竹竿を振り廻して星をおとそうとしておるおろかき、或はまた煉瓦を積みあげて天まで登ろうと企てる狂人にも等しいのであります。

ここに四十三歳の法然聖人の悲痛極まりのない告白がきびしくひびくのであります。聖人は父君の横死を機に出家、十五の時叡山に登られて、廿八年の間、一切経を五回

病気の人は、その病気をよくして下さるように、せめても病苦を軽くして下さるようにと拝みます。

理想主義、修養主義の、人は、理想の完成者として仏をあがめ、そのようになりたいと精進するのであります。

哲学者は、学問の対象として仏教をとりあつかい、色々な観念をめぐらすのであります。

又、否定論者や無用論者は、その人の人生観に不利であったり、無関係である仏様を仮定しているのであります。

このように、人々の顔が異なるように、心もまた千変万化で、その別々の心で描き出す仏様もまた千種万別で、結局はその人のでっちあげた想像の仏様であります。

最初に申しました真面目な医学者の場合は、仏様はお慈悲なお方で、常にお護り頂けると聞いて、その仏様に朝夕お礼を申していたのであります。不幸や災難が続いて来ると、はたして仏様はお護り下さっているであろうか、怪し

も読破、あらゆる修行も続けられた筈句に

「法は深妙なりといえども我が機すべて及び難し、經典を披覽するにその智最愚なり。行法を修習するに、その心ひるがえってくらし。

朝々に定めて悪趣に沈まんことを恐怖し、夕々に出離の縁の欠けたることを悲歎す。忙々たる恨みには渡に船を失うが如く、朦々たる憂には闇に道に迷うが如し」

と。法然上人は自分の智慧も才覚も、あらゆる力が如何ともすることの出来ない断崖、絶壁に直面せられたのであります。それまでは点滅しながらも多少のたよりになった想像の仏様は、その姿を闇の中に没し、行方の知れぬ大暗黒裡に孤立せられたのであります。

善導大師は

「我身は、現に是れ罪悪生死の凡夫、凡劫よりこのかた常に没し、常に流転して、出離の縁あることなし」

と仰せになりましたが、これは信仰上、最終の宣告であります。大師は更に二河白道の譬に

「我今、廻らば亦死せん、住らば亦死せん、去かば亦死せん。一種として死をまぬかれず」

と表白していられます。

園木田独歩の「病床録」に

「余は、蒼茫極まり無き天地に介立して、俯仰千古に亘り大自然と相面して、自己の隻影を顧るの時、今更の如く我生の孤独と荒涼と不安とに堪えず。何物か神秘の力に頼らんと欲する情極めて切なり。植村正久氏は、始めて余の心を開ける人なり。余の心の合鍵は彼の手に在り。故に余はその鍵を以て、余の煩悶より救われんとせり。生死の境に迷える余の心は、氏の導きによって初めて救われるべしと信じたり。氏は「唯祈れ」といふ。祈れば一切のこと解決すべしという。然れども余は祈ること能わず。衰心に湧かざる祈禱は、主も容れ給わざらん。祈りの文句は極めて簡易なれども、祈りの心は難し、得難し誰か来りて、この祈り得ぬ心を救わずや……。」

八五月十九日午後三時、独歩氏病状に泣く  
との血の涙の記録がありますが、真面目な求道者の誰しも逢着する問題であります。

この独歩氏の「祈り得ない者」を見抜かれて、そこに救いの手をさしのべて下さる方が、真実の仏でましますのであります。

善導大師はここに、

「我等、愚痴の身にして

曠劫よりこのかた流転せり。

今、釈迦仏の末法の遺跡

弥陀の本誓願、極樂の要門にあえり」

と述べられて、我等如き愚痴の身は、はてしなく生死の苦海に沈みこんで浮ぶ瀬の絶えてないのに、幸にも釈尊のお勧めによって、末代の凡愚のための弥陀の本願にあい、浄土の門に入らせて頂きました、と満腔のよろこびをもつて仏恩を謝していられます。

四十三歳にして逢着せられた法然聖人の大疑團も、善導大師の聞きひらかれたこの弥陀仏の本願力に氷解せられました。

二十九才の親鸞聖人「いずれの行も及び難き地獄一定」の身も、法然聖人御自身の頂かれた念仏無碍の光明に闇が破られました。

法然、親鸞の雨聖逝きまして七百余年、温顔は寂滅の煙と化し、德音は無常の風にへだてられても、実語は随所に流布されているばかりでなく、両聖によって身証された真仏の光明は、あらゆる凡愚の闇を破って下さっているのであります。

明治の末頃癌で亡くなられた福間久米吉氏のことであり

ますが、福間氏は広島出身の方で、実業、ことに外国貿易に着眼せられ、神戸と東京で盛大にしていられたのに下顎に癌が出来、八回の手術をうけて遂に亡くなられましたが、御長男の当時東大の学生でありました甲松さんが、粉骨砕身して病床に待して、努力に努力を重ねられましたが、第六回目の手術もその効がなく、父上が身を悶え心を悩まして反側転々する様を見られては、慰安の途もつき希望の光も消えました。その時、福間氏が苦しさのあまり、命息を罵つて

『汝の行は偽孝である。己れの許可も得ないで勝手に医者者と相談して、余計な手術をした。貴様達はよってたかって、己れを苦しめるのか?』と責められた。そこで甲松さんはハタと行き詰ってしまふたのであります。

「自分はこれまで孝道をつくしている。身心を捧げて療養をつくしている。神仏にかくまで祈っているではないかこの真心からの祈りを、もし神であったら受納遊されるはずである。もし仏であったら照覧しますであろう。

あゝそれに、なぜ孝道の驗しはないか、療養の甲斐がないか、神仏の御嘉納がないか!

仏も無い、神も無い、孝道も役に立たぬ、何も駄目であ

る。」

と、父の面前で手にして居られた珠数を寸断せられましたそして失望の涙に身もただようばかりでした。その絶望と暗黒の底にあって、フト歎異抄の五章が胸に浮かびました。

『親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念仏申したることいまだそうらわず……。』

そして一道の光明があらわれて、覚えぬ念仏せられました。

甲松さんの親行孝の珠数が切れて、そこに念仏のまことが徹したのであります。

一方、父の久米吉さんは、甲松さんが珠数を切った音に驚いて「彼は子を捨てた。吾子を邪魔者視し厄介者にしている。貴様達はいよいよ己れを見捨てるのだ」と絶望の身悶えして「こんな処には居らぬ」と、頻死の病人が病床を起とうとされるので、看護の人々は驚いてすがりつき、手どり足どりして種々慰めるという痛ましい有様となった。

久米吉さんはこの時、病苦と煩悶の絶頂に立ち「医師も妻子も自分の身体もあてにならない。この世界には何一つ依頼すべきものはない」となられた時、歎異抄の末文の

「煩惱具定の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみ



なもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念  
仏のみぞまことにておわします…」

という御文が切実に味われ、其一刹那、ふと

「余は仏陀が余を助け給うというのを聞きしものにあ  
らずや」  
という念が浮んで思わず念仏を称えられたのであります。

以上は菅瀬芳英師の『実験の信仰』に録されましたもの  
であります。近角先生の『歎異抄講義』に

「数日前にも発狂して絶食し、心臓麻痺で亡くなられた  
憐むべき人があった。その人の近親が信仰家であったた  
めに、臨終に及んで力をこめて如来のお慈悲を説いて聞  
かせ、唯念仏せよ、と勧めると、口を指して、称えるこ  
とが出来ぬ、ということを知らした。すると、私が称  
える故、その心持になりたまえというて、その人を抱  
き、頂に接して念仏しているうちに、頭をうなずき、心  
中大いに喜んでほどなく亡くなられた」  
とあります。これこそ、祈る力も、称える力もない者の救  
いを身をもって知らせて下さる実話であります。

○ 月影のいたらぬ里はなけれども

ながむるひとのところにぞすむ 法然聖人

## 養老院生活半ヶ年

私は昨三十九年十月、島根県大田市川合養老院へ入らせ  
て頂きました。八十四の老境、自炊生活に行詰つたため  
であります。しかし、それからは先ず、健康で有難い日送  
りをさせて頂いて居ります。

昔、良寛上人も、老いて自炊生活に困られて五合庵を出  
て山を下り、懇意な農家にたより、禪宗の僧で居られるま  
んま他力念仏に安住して一生を終えられたと聞きました。

養老院は一つの小さい世界の縮図と申します。老人大学  
へでも這入つた気がします。あらゆる世相、人情、衣食住  
等々、有形無形にわたり、学びとることが沢山あります。

死線に近い老男老女は、死苦、老苦、病苦に直面して居  
りながら、五欲旺盛な日夜を過して居ります、私はその組  
のトップであります。

○ 当地方は昔から仏縁の厚い所で在院者の八九分は仏教量

### 読書と教養

福島政雄著

定価、四八〇円。送料八〇円。

発行所、明玄書房、東京都新宿区早稲田町四二。

振替、東京一四七五八三番。

(はしがき) 書物の虫といわれるほどに私は書物に対し  
て愛着を持つ書籍狂といわれても仕方がない。私は書物を  
愛撫し、読みがじり、あるいは通読幾回しみじみとこれを  
味わい、あるいは一部分だけを噛みかえして読む。…書  
物は私の心の養いであり、孤独性である私の心の友であ  
る。身辺に書物が無ければ落書かない。書物は私を生ぎ生  
きとさせる。このような私が読書六十余年の想い出を書い  
たのがこの小著である。……。

- (一) 序説 求道を中心(仏教と私) (二) まことの道と  
読書。 (三) 愛読書というもの。 (四) 求道問答。 (五) 童  
話と伝記。 (六) 藤村への親しみ。 (七) 読書三年の回想
- (八) プラトンを知る。 (九) 詩経と易経。 (一〇) 論語に親  
しむ。 (一一) 福翁自伝。 (一二) ファウストを想う。
- (一三) 大無量寿経。 (一四) 祖聖親鸞。 (一五) 古典談義
- (一六) 明治文学と教養。

## 三 瓶 徳 英

眞の人々であります。念仏の声はほとんど聞かれませぬ。  
ただ講堂兼食堂の広間に眞宗の仏壇があり、朝夕の時  
だけ、寮母さんが灯明、焼香、打鐘する時、数名の爺媪の  
念仏の声がきかれます。入院者の中には篤信の人も数々あ  
るとは思いますが、内心に深く蓄えて外へ出さぬ人もある  
様に思われます。

仏法を聞きたい人は多く、たま／＼悪人正機や、歎異抄  
十三章など話しかけると、入魂な人は、

「そんなことを云うから眞宗はつぶれる。お前の様な馬  
鹿坊主、なまくさ坊主が居るから御法義はひろまらぬ」  
と罵りますが、これが本当です。

しかし、私としましては、此法に遇えた事を有難く嬉し  
く思うて居ります。

教行信証に

「謹んで浄土眞宗を案ずるに、二種の廻向あり。一つに  
は往相、二つには還相なり云々」

と述べたまい、御和讃に

○往相還相の廻向に、もうあわぬ身となりにせば  
流転輪廻もきわもなし、苦海の沈淪いかがせん。

○往相の廻向ととくことは弥陀の方便ときいたり

悲願の信行えしむれば、生死すなわち涅槃なり。

○還相の廻向ととくことは、利他教化の果を得しめ

すなわち諸有に廻入して、普賢の徳を修するなり。

と仰せられました。

弥陀の方便、お手まわしで、世の中、一切の苦樂、悲喜が縁となって、絶対の他力、絶対の慈愛、絶対の眞実が感得感謝せらるる人は多くあると思います。

○  
養老院は有難いことも沢山ありますが、窮屈なこともありませんため、私は納骨堂の次の間で読書したり休憩したりしながら、聖徳太子の夢殿の御生活をおしのび申して、勿体ないな、と思います。

さて、聖人八十三の御著述の愚禿鈔に

「賢者の信をききて、愚禿が心をあらわす

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり

愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり」

と、上下両巻の巻頭にお述べになって居られます。賢者

修善も雑毒なる故に 虚仮の行とぞ名づけたる

蛇蝎奸詐の心にて 自力修善はかなうまじ

如来の廻向をたのまでは 無慚無愧にてはてぞせん。

と、御自らを懺悔悲歎していられます。

さて、悪の自覚は容易なことではありません。「汝は悪人である」という仏語が眞に聞えねば、他力の信仰へは手が届きません。

○  
私が東京在住の時、中島忠博という早稲田大学の理工学部  
の学生で、九州唐津の出身の有難い念仏青年と懇意になりました。その頃、亡妻が「あなたはどうしてナンマイダ  
ブが云える様になりましたか」と問うと、同君曰く。

「私は兄弟が多く、祖父の三四郎に幼時から特に可愛が  
られ、山へも畑へもつきまよって、中学を卒業するまで  
ほとんど離れませんでした。

祖父は小声でうたい、時々念仏しては、

すこしでもよきことあれば迷うのに

まるでわるうて わしはしやわせ

と歌って、日夜聞かされ、それが私の腸へ染みつき、今  
東京に出て、淋しい苦しい時など、念仏称えますと胸が  
晴れ／＼します」

と語ってくれました。いつも珠数をポケットに入れて居ら

は内賢外愚で、御師匠、法然上人は、愚痴十悪の自分だと  
常に仰せられながら、外面はおだやかであたたかな頭の下  
った言行で御接し下さるから、耳四郎の様な人も、荒武者  
熊谷直実の如き人も念仏者になった。それとあべこべに  
親鸞は、内心愚痴無智で貪欲に汚れながら、表面ばかりは  
人師と呼ばれたい、内愚外賢の浅ましい身故に、それを見  
捨てはせねぞ、可哀想に思うぞ、必ず救うぞとの仰せが有  
難いとお教示であります。

○  
善悪についても鋭い御批判を聖人からお聞かせ頂いて居  
ります。

善悪の論は、古今東西多数の人達が論談して居りますが  
倫理道徳でも、平常時と非常時とは言い方や考え方が違っ  
て参ります。時代の変化、国境の相違などによっても変っ  
て来ます。

○  
聖人は「善悪の二つ総じてもて存知せざるなり。煩惱具  
足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらこ  
とたわごとまことあることなし」と仰せられました。

悲歎述懐和讃には

浄土眞宗に帰すれども 眞実の心はありがたし

虚仮不実の我身にて 清浄の心もさらになし

悪性さらにやめ難し 心は蛇蝎の如くなり

れました。

○  
大太平洋戦争のため昭和十九年十二月卒業して直に航空隊  
に入り、二十年二月戦死され、祖父も同じ頃死なれたと忠  
博君の御父上から通信を頂き、痛惜、悲憤の情やるかたな  
く、今なお持統して居ります。

○  
浅原才市同行が偲ばれます。御在世中幾度も法話をまじ  
え、下駄屋へも数回参りました。著書の中で感銘の深いも  
のをすこし写して見ます。

○  
同氏は昭和七年一月十七日八十三才で往生、師匠寺は井  
田村の涅槃寺（眞宗）でありました。

○  
わしの心はわや／＼で

雲ともとれぬ

霧ともとれぬ

風ともとれぬ

とりとめのつかぬこのころ

しようがない才市、たすける親のおしひよ

御恩嬉しや なむあみだぶつ。

○  
浅ましや

親の御恩を忘れてくらす

どこからか  
わしやしらねども御さいそく  
きいてみれば  
ナムアマダブのごさいそく  
また来たよ 浄土から

○ 称えるもアマミダ仏

稼業するもアマミダ仏

ママをたべるもアマミダ仏

道もあるくもアマミダ仏

世界のもはアマミダ仏

ことごとくアマミダ仏のもの

アマミダ仏のもの、才市のもの

何もかも海も潮も皆一つ

御恩うれしや ナムアマミダブツ。

○ わたしやしやわせ

死なずにまいる

生きさせてまいる浄土がナムアマミダブツ

○ アミダさん

たすけたけりやあ、たすけさしやう

罪はよおやらぬ  
罪はよろこびのたね。

○ 悪にかたまる私が

悪をも見ずに法をよるこぶ

親のおかけて機をとられ

御恩うれしや ナンマンダブツ。

○ 死んでまいるじやあない

死ぬるまで悪をつくつて

死なずに参る親の里

死なずに申す阿弥陀の念仏

ナンマイダブツく

○ 〇

まだ有難いものが沢山ありますがついでに私の腰折れ、御  
叱正願います。

○ 明けて起き食うては動き又寝るは

眠らずに見る夢にもありなん

○ 死と食を待つばかりなる養老院

世間の人に此組もありや

○ さすらいで流れ着きにしうきぐさの

ここに朽ちなんさだめなるかも

○ 仏よりの催促なるか念仏して

絶対の慈愛真実を感ず

○ 森松子さま御一家の御慈愛の

御恩思えばただねぶつして

○ 今日もまた弘誓のふねの中なれや

悲喜の荒浪よしたかくとも

八十五翁、愚闇無頼 追壞旧事 慚愧念仏。

四〇、五、十五、 愚人 徳英 和南

### 御仏は枕辺に

拜復、頃日は御病中、失礼仕り候。

御たすねの件、一往ごもつとも存じ候えども、自力の  
執心を破らんと力むのは、我が手足にて地をはなれんとす  
るが如く、決して出来るものに非ず候。

私共の「これではく」と、あとびさりするのを、大慈

の御親は「それでもく」と、向い給える御すがたが南無

阿弥陀仏の御名に候。

一念が無ければならぬと力むのも自力の執心に候うべし  
さればこそいつまでもたつても安心できず候。

今はそうではない「是非ともすくわん」と誓い給いて、  
その大願成就の御満足なるお喚び声が

「そのまま我をたのめ我にすがれ、必ず守る、引き受く  
るぞ！」

との切なるお言葉とならせ給えるなり。私共はこの御名  
あり、この御喚声を耳に聞くことを得る幸栄、これにすぐ  
べきはなし。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と信じ  
たる一念に、仏智の不思議、願力の不思議として必ず決定  
の喜びを興え給う、これが信の一念に候。喜びも決定もみ  
な仏智を信じ願力を信する所に自然に興えらるる徳に候。

喜びや決定は信には非ず、信のはたらきに候。

何卒、御身の枕辺に立ちて屋夜待ち給える大悲の御親の  
ましますことを忘れぬよう、念仏相続なされたく念じ入り  
候。御親は何よりも念仏の声を聞くことをお喜びなさるる  
ことに候。

右、篤とお味いの上、尚不審あらばお尋ねくだされ度候

(註) 右の御手紙は住田智見先生が、或求道の翁に遣わ

されしもので、実に法海の磁針である。

堂の鈴 (十七)

佐藤 強三郎

信哉は近頃突然に柏崎の一郎を訪ねることがよくある。或春の日また訪ねて来た。一郎は喜んで迎え、色々の事を尋ねた。

一郎「親鸞聖人は法然上人の御弟子とのことですが、それはどういう仔細からですか」

信哉「法然上人は幼年の頃お父さんが殺害せられ、その御遺言によつて仏道に入り、十五の時比叡山に登られ、四十三歳までに一切経を五回もお読みになり、あらゆる修行を続けられました。どうしても安心が出来なかつた最後に源信僧都の往生要集を手引とされて善導大師が凡夫のたすかる念仏の白道を、観無量寿経義疏に説いてあると知られ、その著書を何度も読み続けられるうちに」  
「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に、時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業(浄土に生れる正しき種因)と名く、彼の仏の願に順ずるが故に」

られてあった。

しかしまだ法然上人の如き絶対他力の念仏ではなかつた。俗なたとえではあるが、彼の石童丸が方々を親を尋ねてさまよい歩いた如き心持で称える念仏であつた。如何に親の名を呼びながら探し求めても、親を知らぬ者には親の方から名告り(なごり)をあげない限り、現に親の前に立ちながらも安心出来ぬと同様である。どれだけ巡礼して歩いても際限がない、そのうちに生命がつかまる。かくして流転しているのである。

然るに如来の本願は、親の方から名告り求め給うところの強き意志であつて、南無阿弥陀仏という名号は親の方から名告りをあげて下さるみ声である。即ち彼(じんかん)の願に順ずるが故に」といふ御文が心肝に徹すと常に語られました。

かくて法然上人は、其の著、選撰本願念仏集の題下に「南無阿弥陀仏、往生の業、念仏為本」

とお書きになつて御自身の体験を披瀝せられました。親鸞上人は、教行信証の結文に

「愚禿積の鸞、建仁辛酉の曆、雜行をすてて本願に帰す、……これ専念正業の徳なり。これ決定往生の徴なり。よりに悲喜の涙を抑えて由来の縁をしるす。

慶しき哉心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流

という御文に当り、忽然として広大の靈光にふれ大安心を得られたといふのです。

法然上人は後目になつてその体験を物語られて、彼の仏の願に順ずるが故に、という五字を見るにいたつて、一心已証の時、浄土門の基を開いた、と仰せられた。順の一字が眼目である。

かくて法然上人の御一代は

南無阿弥陀仏と称する一つで往生する。

という簡明なる言辞で有縁の人々を教化せられました。一代仏法は如来の本願の外なく、この本願に信順して南無阿弥陀仏の名号を唱うる事に帰結する。

△近角先生著、聖人の信仰▽

これが仏教の真髓であると確信せられたのです。

これを歴史的に言えば、天台の慈覚大師が支那の五台山に登つて、一行三昧の念仏を伝えうけて、比叡山において念仏を唱えられた。又真言宗にもすでに念仏が伝え

す。ふかく如来の矜哀(しんがい)をしりて、まことに師教の恩厚をおおく、慶喜いよいよいたり、至孝いよいよ重し。ここによりて真宗の詮(せん)を鈔し、浄土の要をひろう。ただ仏恩の深きことを念うて人倫の弄言(ろうげん)を耻じず、もしこの書を見聞せんものは、信順を因とし、疑謗を縁として、信樂を願力にあらわし、妙果を安養にあらわさん」  
と信順の誠をつくしてお喜びになった。時に親鸞上人は御年二十九歳でありました。

後、承元丁の卯の歳、八聖人三十五歳、法難に遭われ法然上人は四国へ、親鸞聖人は越後へ流罪になられ、やがて関東二十年の御生活をへて、六十すぎに京都にお歸りになり、九十歳まで長寿を保たれました。

七十五歳頃の御和讃に

○曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずば このたびむなしく過ぎなまし

○阿弥陀如来来化して 本師源空としめしけれ

化縁すてにつきぬれば 浄土にかえりたまいにき

と師の恩徳を讃嘆なされました。」

一郎「真宗の教は法然上人が肇められたのですか」

信哉「真宗は、お釈迦様がお説きになったのです。聖人の正信偈に

如来世に興出したもう所以は

唯弥陀の本願海を説かんと  
とお示し下さってある。

又歎歎異抄には

〓 弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言なるべからず、善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむねまたもつてむなしかるべからずそらうるか。詮ずるところ愚身の信心におきてはかくのごとし。このうえは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからいなり〓 (第二章)とあります。

聖人は次の高僧和讃をお作りになつて讃仰されました  
印度では、竜樹菩薩、天親菩薩。

中国では、曇鸞大師、道綽禪師、善導和尚。

日本では、源信僧都、源空聖人。

又、聖徳太子の奉讃として、

〇 仏智不思議の誓願を 聖徳皇のめぐみにて

正定聚に帰人して 補処の弥勒のごとくなり

〇 上宮皇子方便し 和国の有情をあわれみて

如来の悲願を弘宣せり 慶喜奉讃せしむべし

と随喜しておいでになります。

流転輪廻もきわもなし 苦海の沈淪いかげせん

〇 如来二種の廻向を ぶかく信するひとはみな

等正覚にいたるゆえ 憶念の心はたえぬなり

〇 弥陀の浄土に帰しぬれば すなわち諸仏に帰するなり

一心をもて一仏を ほむるは無碍人をほむるなり

信哉「聖人は本願他力真宗を弘められ、教行信証を著わされましたが、その行巻に、

他力というは本願力これなり。……しかるに本願力の廻向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相、往相について大行あり、また浄信あり。

大行というは、即ち無碍光如来の御名を称するなり。

浄信というは、即ち利他深広の信心なり……。

証というは、すなわち利他円満の妙果なり……。また往相証果の願となづくべし……。

二つに還相廻向というは、即ち利他教化地の益なり。

しかれば、もしは往、もしは還、一事として如来清浄願心の廻向成就したまうところにあらざることあることなし。……

と説かれてあります。

又親鸞聖人は聖徳太子を尊崇され、皇太子聖徳和讃に

〇 和国の教主聖徳皇 広大恩徳謝しがたし

お釈迦様が仏教をお説きになつて以来、印度、支那、日本と各時代に高僧が出現なされて、仏の本願に信順、帰命して、これをお伝え下さったのです」

信哉「如来廻向といふことは破格、破天荒の教訓である。全体廻向という言葉は、普通は我々が積んだ功德をめぐらして他人や仏に向けるという意味に使われている。これが従来からの廻向の意味である。聖人はこれを、如来が一切苦悩の衆生を捨てずして、廻向を首として大慈大悲心を成就して下さることであると、仏意を深く頂かれてお説きになりました。

この如来廻向の無限の淵源がなかったならば、我等の持っている抵抗我欲の思想が満足せしめられ、一転して如来に帰依信順する事は出来ないでしょう。そのことは聖人の次の和讃によく説かれてあります。

〇 弥陀の廻向成就して 往相還相ふたつなり

これらの廻向によりてこそ 心行ともにえしむなれ

〇 往相の廻向とくことは 弥陀の方便ときいたり

悲願の信行えしむれば 生死すなわち涅槃なり

〇 還相の廻向とくことは 利他教化の果を得しめ

すなわち諸有に廻入して 普賢の徳を修するなり

〇 往相還相の廻向に もうあわぬ身となりにせば

一心に帰命したてまつり 奉讃不退ならしめよ

〇 聖徳皇のおあわれみに 護持養育たえずして

如来二種の廻向に すすめいれしめおわします

〓 二種とは往相と還相

とお示しになりました。聖徳太子は千三百年前にお出ましになって、日本に仏教を弘め、又十七憲法を創定されました。

このように、無限の仏が、無限の力をもって、仏陀の境にひき入れて下さる。願力摂取の法なればこそ凡夫が念仏して往生出来るのであります。

聖徳太子の十七憲法第十條には

忿を絶ち瞋を棄て、人の違えるを怒らざれ。人皆心あり、心各々執る所あり。彼是なるときは我非なり、我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共にこれ凡夫のみ。是非の理誰か能く定むべけん、相共に賢愚なること環の端なきが如し。是を以て彼人瞋ると雖も、還つて我失を恐れよ。我独り得たりといえども衆に従つて同じく奉え

これを以て見れば、我等が日常用いるところの是非善悪なる思想は、自己を善とし、他を悪なりというのである。今日社会問題を闘争をもって解決せんとする態度は、ますます平和を亂し人類の幸福を破壊するものである。

憲法第二条に

篤く三宝を敬せよ。三宝とは仏法僧なり。即ち四生の終帰、万国の極宗なり。何れの世、何れの人かこの法を貴むにあらざらん。人はなほだ悪しきものすくなし能く教うればこれに従う。それ三宝に帰せずんば何を以てか枉れるを直さん。

これは信仰を以て人生問題を解決すべき事を教えられたものであります……」

後から／＼次々と色々の話が出ました。

一郎はお藤と共に、弥陀の誓願、如来廻向、などと色々の話を聞いてよろこんだ……。

春の或日、久し振りに一郎はお藤をつれて花見がてら五智のお寺へ参詣した。境内の桜は紅、松は緑。何時ものように本堂正面に下っている鈴を振り、鰐口をたたき、手を合せて内仏を拝んだ。お藤は赤ん坊を抱いて共に頭を下げた。堂の正面には、上から丈夫な綱が何本も下っている。一本づつに……堂の鈴……が着いている。

参詣人は後から／＼と来て、お賽銭をあげ鈴を振っては仏様を拜んで帰って行く。

鈴は振ればカラカラと鳴るが、手をはなせば静まる。風が強く吹けば、綱はゆれ鈴は鳴るが、止めば又静かに下って音もしない。二人は境内にあるベンチに腰をかけ、お藤

見込みがない。こんなでは駄目である、と自暴自棄になつてくる。その時いくら口で悪いと云つても、それは悪を苦にして煩悶しているの真に頭が下っているのではない。だから自分の身体の中で善と悪とが互に戦い合っているの落付がない、心中は騒いでいるのである。

そこで何の關係もない人に無闇と反抗的になり、乱暴な行為をする。苦しみのハケ場所をあたりかまわずに、どちらでも爆発させるのである。新聞などに見る色々の兇悪犯罪も起るわけだ。そしていつも世の中が悪い、人が気に入らぬ、と何等自己を反省する余裕も落付きもなくなつて、人を憎み世を恨むばかりになる。それでは慚愧したのでも何でも無い。恐ろしいことだ、など色々と感じた。

お藤を見て

一郎「もう一度お参りして、あの鈴を振ってみよう」

お藤「ハイ、あの鈴は丈夫な綱にしばられているから、いくら振っても落ちませんね」

と笑いながら坊やの手に綱を持たせて、また二人で静かに振った。鈴がガラガラと鳴れば、坊やは見上げてニコッと笑って母を見た。通りすがりの人々も可愛い坊やと美しいお母さんを見て楽しく笑った。

一郎は帰りの道々思った。自分は今無限の大悲に浴して

は子供に乳房をふくませている。一郎は思う……。

ハああ、自分は——堂の鈴のようなものである。人が振れば鳴る、叩けば音がする。然しあの様に頑丈な綱にしっかりとしばられている鈴は、いかにゆれても、鳴っても落ちる心配がない。一つ一つの鈴も皆そうであろう。誠にめいめいが不思議な綱……本願の綱……にシツカリとつかまれていることを、即ち願力摂取の法を自覚させられ信順するならば落ちる不安がない。不安がなければ無暗に泣いたり、わめいたり、騒いだり乱暴したりすることも自然になくなってくるであろう。

一人、一人がみな、仏の大願業力に摂取されていることを信するならば、世の風波は、よし如何あらんとも、落ちる不安がなくなるから自然に落付いてくる。

親鸞聖人は、

蛇蝎奸詐のころにて 自力修善はかなうまじ

如来の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん  
とお示しになったが、ホントにそうである。もし如来の廻向によって本願を信じなかったら本堂に慚愧の心など起きよう筈がない。

常識的に考えて自分は悪いから善くしなければならぬ。自分の力で善くなつて行こう、善くなつて見せる、と思つてやり直す、思う様に行かぬ。遂には自分には善くなる

いる。今後成功しようと、失敗しようと、世の毀譽褒貶の外に立って、何事も業報にさしまかせて、偏に如来の大願業力に乗じて行こう、自分は如来の子である。知らざるを知らずとし、未熟を未熟とし、人を離れ、仏に帰して無碍の大悲を仰いで行こう。

煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば

すなはち穢身すてはてて 法性常樂証せしむ

ああ、罪悪深重、煩惱熾盛のものを、どこまでも呆れ給わざる本願を仰いで行こうと念じた。

二人は境内の松の根本にある茶屋へ寄った。赤いもうせんが敷いてある。庭には一面に桜の花が散っている。桜餅みつ豆などを食べ、赤ん坊にも甘酒を吞ませて楽しんだ。

やがて坊やは鳩を見て、取ってくれとせがむので、お藤は鳩の方へ行つた。一郎は笑つて楽しそうに見ていた。

……お小夜はその日、思いがけず、境内で一郎の姿を見つけ、覚へられない様に後を追って歩き廻った。

一郎は家へ帰って、一人仏前にお参りして色々のことを追憶した。お藤もあとで仏様へお参りした。 未完



# あとがき

「米国人は他人の意見を聞こうとしな  
い。……ベトナムの国民性に理解がな  
い。自分の先入見を押しつけようとする  
。かかる態度は、自分の方が優秀な人  
種だと考える場合に当然出てくる。そし  
て抵抗を誘発する」

との吉田元首相の発言は、正論であり、至  
言であると朝日新聞夕刊の素粒子は賛意を  
表しています。

それにつけても、国連事務総長のウ・タ  
ント氏の最初の発言「自分だけがよく、相  
手は悪いときめつけるところには平和はな  
い、互に自分の不完全さを知つて、そこか  
ら話合ひの場が出来る」という意味の言葉  
を改めて思い起されませう。

独善、独断は、米ソの関係ばかりでな  
く、米国とベトナムの間にも、否、あらゆる  
世界や家庭内にも許されないこととわが  
こととして省みさせられます。

「えらくないのにえらそうがる人は骨稽で  
あるが、偉い人がえらそうがるのは当然の  
ことながら、そこには抵抗を感じる。それ  
につけても、えらそうがらない偉い人に会

うと本当に頭が下がる」——(仏と人)

多くの人を導かれながら「親鸞弟子一人  
も持たず候」と仰せになる聖人の信徳のい  
よ／＼渴仰されることでもあります。しかも  
それは所謂聖人の謙遜でも何でもなく、そ  
れが本当で、それ以外はうそ、間違いと諦  
忍される聖人こそ、如来の御代官と仰がず  
にはいられないのであります。

○

近角先生の第十一章の御講話は、歎異抄  
の歎異抄と名付けられる真面目をお知らせ  
下さるのであります。異なるを歎き、泣  
く／＼筆を染められた著者唯円房の心を知  
らせて頂きましょう。

松本様のお味いは、愛媛大学の仏書の機  
関誌「蓮」から転載させて頂きました。

三瓶老師の随想は、養老院中での信の旅  
姿を誌して下さいました。老師は浅原才市  
翁とも信交の深かつた方でありませう。共に  
八十の坂を越えられて心琴の相和されるこ  
とでありませう。

佐藤強三郎翁は、すでに亡くなられまし  
たが、御生前に三回分ほど原稿を頂いて居  
りましたもので、翁の記念として有難く頂  
きました。これ程までに「慈光」のことを  
を祈念下さつたことを深く謝しまつるばか  
りであります。

## 御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半、

※ 一道会例会

市電、新郊通一丁目下車、東へ一丁半。

○毎月廿四日、午前午後、昭和区小椋町

※ 教西寺法話会。

市電、御器所通り下車。桜花学園東側。

○八月七日、午後二時、尾西市三条板倉

※ 蓮光寺修道会。歎異抄八章講話。

一宮駅よりバス尾西三条下車。

× × ×

定 額 半年 二百円 (送共)  
一年 四百円 (送共)

編集・発行人 花田 正夫

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十七巻第七号 昭和四十年七月十五日発行 (毎月一回十五日発行)  
昭和十四年七月二十三日第三種郵便物認可